

2002-25

「菊屋まつり」フリートーク

加藤典洋・竹田青嗣・橋爪大三郎・成田昭男・
小浜逸郎・北川透・瀬尾育生・吉本隆明

瀬尾

こんには。きょうは盛大なお客様でどうもありがとうございます。えー、これから第三部のフリートークというものを始めます。第三部の司会をやります瀬尾と申します。よろしくお願ひします。えーとまあ、あれこれ裏方を忙しく駆け回っていたところ、いろいろこう、司会をやらうと思つて考えていたのを全部忘れてしまったので、何を言つたらよいかわからないですけども。あのー、この菊屋まつりをあのー、四回目ですけれども今年やらうということで吉本さんを呼ぼうということ、あのー、八月の末にお宅に伺つて、こうこうこういうことで吉本さんを中心にして、あと若手のゲストを加藤さん、竹田さん、橋爪さんなんていう方を呼んでやらうというそういう企画と、それからまあテーマなんかを申し上げたところ、吉本さんがおっしゃるには、菊屋ともあろうものがそんな真面目な企画をしてもいいのかわつて、そういうお話だったんですけども、別にそのー、菊屋はさっき「ひょうきん族」じゃないかっていうまあおほめの言葉をいたいたわけですけども、そうでもなくて、もともと相当真面目な雑誌ですつとやっております、きょうもまあ相当にハードな真面目な企画で、第三部もあのー、超真面目な、難解な討論ができるだろうと思つております。それで、ゲストの方々をひとりずつお呼びしたいと思ひます。紹介を簡単にさせていただきます。

まず最初に加藤典洋さんの紹介をします。えーあのー、現在加藤さんを皆さん御存知だと思ひますけれども、若手で最も注目されてる批評家ということになっていきますけれども、ぼくたちが学生だった頃、

二

三

加藤さんも学生だった頃は、あのー実は、あのー、まあ限られた範囲ではあるけれども非常に熱狂的なファンをもつ彼は小説家でした。で、あのー、昔の友だちが会うと、あの頃の加藤典洋の小説はすばらしかったというような話がでるくらい、まあ一時代を風靡したっていうか、そういう知るひとぞ知る小説家だったわけです。で、それから勤めの関係で一九七八年からでしたけれどもカナダへ渡つて、そこで四年程生活して、八二年に日本へ戻つてきて、その後は現在我々が知っているような批評の活動を始めたということ。で、あのー、著作には「アメリカの影」というのが去年の春ぐらいでしたか、できました。日本の戦後史っていうのを全く新しい角度でとらえ直したという、若手で注目された批評であるわけです。で、あと近著としては近いうち弓立社、まあこれは一年程前からであるという予告があつて未だにでないという、まだ当分でないんじゃないかという噂もありますが、「批評へ」という批評集がでることになっていきます。

吉本さんとの関わりでいいますと、何か昔「言語」として美とはなにか」について百枚二百枚という論文を書いたという記憶が、それで何かカナダに渡るときに全部紛失してしまつたというそういうエピソードがあつて、最近では「群像」に、吉本・植谷論争とかいうのがあります。それについて「還相と自同律の不快」という文章があります。それじゃ、盛大な拍手でお迎えください。加藤典洋さんです。

続きまして二人目のゲストの方です。竹田青嗣さんの御紹介。えーと、竹田さんは現在加藤さんと並び称せられるといいますが、若手で最も注目を集めている批評家、ということになっていきますけど、一説には歌手じゃないかという話もありまして、まあ知るひとぞ知る、井上陽水の歌を歌わせることのひとの右にでるひとは井上陽水本人しかいない、というくらい美声の持ち主なんだそうです。まだ聞いたことないんですけども、今晚あたり聞けるのではないかと期待をしていますが、それで、文芸批

評のほかには西洋思想史の方のエキスパートでもあつて、そのほうの著作もあります。結局西洋思想史なんていうと、デリダとかドゥルーズとか何とかいってぼくらの頭ではどうもあんまりよくわかんないっていうのを、大体ぼくたちの頭にわかるような可能な形で、ぼくらの体験に適応可能な形で書いてくださっている方です。えー、著書には、在日朝鮮人作家を扱った「人日」という根拠、それから御存知「陽水の快楽」、それから最近の「意味とエロス」などがあります。

吉本さんとの関わりでいいますと、JICCですわ、「宝島」のアレでた「現代思想入門」なんかで吉本さんについての文章がたくさんあります。それから吉本さんの対談集「不断革命の時代」のなかに、吉本さんとの対談があります。で、最近では「文芸」で、「世界という背理」小林秀雄と吉本隆明」という連載をされています。じゃ、登場していただきます。竹田青嗣さん。

それでは三人目のゲストの方です。橋爪大三郎さんで、前の二人の方は一応文芸批評家ということになってるんですが、橋爪さんの場合は学者といえますか、在野の社会学者ということになっていきます。あのー、学生時代は俳優をやつていまして、今では伝説的存在になつて居る芥正彦の劇団駒場というところで俳優をやつて、路上でわけのわからないことを叫んで走り回つたということがあつて、あれども、あのー、もう十年このかたになりますけれども「記号空間論」という壮大な構想をもつた言語論から数学理論まで包括した社会学理論という何かよくわけのわからないものですが、そういうものを構想して、あのーこれも知るひとぞ知る、公表しないもんですから知るひとぞ知るんですけども、水面下で膨大な構想をもつた理論を展開して、去年ですけれども勤草書房から「言語ゲームと社会学理論」ウィットゲンシュタイン・ハート・ルーマン」これ、彼の理論のほんの何となくか波頭がちょっと見えたんじゃないかという程度のアレなんですけれども、それができました。で、近いうち「仏教の言説戦略」が同じ勤草書房から近著があるみたいです。

四

五

それで吉本さんとの関わりでいいますと、その「記号空間論」のなかにいろいろ吉本さんに触れた文章というのがあるわけですけども、そのほかに御存知の方もあつたかもしれませんけれども、レヴィーストロースの「親族の構造」というのがまだ翻訳されてないときに、彼が自分で翻訳したのを持っていて、吉本さんが家族論・親族論なんかを展開されてるときに、その自分の訳語を提供して初めて吉本さんにそのレヴィーストロースの「親族の構造」を読ませたと、まあそういう因縁があるのです。では登場していただきます。橋爪大三郎さん。

以上でゲストの説明が終わつたかというのと、まだもうひとりおりました、えー、あとひとりゲストの三人と並んでいただく、あそこに「菊屋理論部おじさん課」って書いてありますが、ああいう理論部っていうのはひとりしかおりませんので、彼ひとりなんですけれども、菊屋を代表してというか何となく、菊屋としての理論家の成田昭男さんに登場していただきますが、まあ彼は菊屋としての「理論家」であるので、菊屋の理論的な水準の高さも低さも全部彼の責任になっていくということでありまして、昔は自分で雑誌やつて「鮎川信夫論」っていうのを書いていました。あのー、鮎川さん、きょうの朝、亡くなつたっていう話を聞いたもので、ちょっと落ちこんでいるのでありますが、まあ、その分、ちょっとあの、BGMがちょっとアレなんですけど、あのー、最近では「菊屋」誌上に「ネハン詩論宣言」というのを書いておられます。何を宣言してるのかさっぱりわからないという……：：：それでは中部山岳地帯の代表、成田昭男さん、どうぞ。

成田 彼はちょっとでたがりの傾向があるので、紹介が全然終わらないうちに出してしまうという、たつぷりBGMまで聞かせてしまふという……カラオケ大会じゃなかったですか、きょうは。

あ、いやいやいや。あのそれは夜やりますのでよろしくお願いします。えーそれで、最後に吉本さんに加わっていただきますが、吉本さんについての紹介は省略させていただきます。本名で吉本隆明（たかあき）さんと呼びすると何か別人を呼んでるみたいですので、いつも呼んでるとおりに紹介します。吉本隆明（りゅうめい）さんです。

それではあのー、何というか、何をやらしたらいのかさっぱりわからなくなりましたのですが（成田笑）、きょうはせっかく菊屋まつりに吉本さん来ていただいたので、まああの、ひょうきん族かどうか知らないですけど、あのー要するに、日頃語られたことのない吉本隆明を語り、かつ語らせようということをやりたいわけです。で、ぼくもあのー、司会やるんだからちょっと勉強してこようというふうに思ったんだけど、いろいろ忙しかったし、まああの何とのか、語られたことのない吉本さんを語ろうっていうのに勉強しても仕様がなないんじやないかっていうんで、何もやってこなかったんで、頭真っ白なんですけど、で、あのー、大体ゲストの皆さんにも何も考えてこなくてさういってあらじめ連絡してあって、吉本さんのお話を聞いて、ぶっつけ本番でなるべく喋ってくださっていいというふうに出ておきましたんで、一部成田さんなんかは随分勉強なさった（会場笑）らしいんですけども、まあ大抵そういう成果というのは空回りするだけなので、そのほうはまあ大丈夫なんじやないかって、でも何かさっきゲストのひとを見ていたら、何かいろいろメモか何かあって、ぼくなんか結構こんなにメモがあるわけですが、これでも準備してないわけですけど、で、あの、形としてはまずゲストの方にいろいろ喋っていただいて、まあ十分ぐらいいいじゃないかという感じで最初喋っていただいて、それでまあ吉本さんに答えていただいて。それで順次会場の方にもマイクを回しますので、ソクソクと楽しみにお待ちいただきたいと、そういうことです。それじゃ、まあ何とのか、あのー、一応ですね、会場の方にもお願いしときたいんですけど、こういうふうには吉本さんをお呼びすると、いつもこういう

質疑応答になると、何かあの、二十年前の怨念がどうのこうのとか（会場笑）、恨みつらみを言ったりとか、ちょっと人生相談みたいなことをやってみたり（会場笑）とか、そういうのがあるんで、いいんですけど、そういうのはいいけど、やっぱり一応テーマは『イメージの世界都市』というふうになっているので、それに絡めて、それに関係する形で人生相談でも何でもやっていただければいい。それじゃ、トップバッターということで、あのー、今のお話に関する感想なんかも絡めて、じゃ加藤さんのほうからひとこと、お願いします。

加藤 加藤です。あのー、実はきょう東京駅で吉本さんと偶然お会いして、ここに来るまで一時間程お話ししてきたんですけども、何か、まああんまり何も考えなくてもいいっていうんで、何も考えてこなかったところにもってきて、あのー、二日前に電話、あのー、何も考えていないだろうなっていう電話を（会場笑）もらったんですけども、考えていないって言ったなら、なあに、ひとつふたつ考えてくれればいいんですけども、これをほめかされて、ちょっとギョッとして、慌てて考えようとしたようなことは全部新幹線のなかで吉本さんに言っちゃったような気がするんです（会場笑）。

きょうのお話は今『海燕』っていう雑誌に連載されている『ハイ・イメージ論』で吉本さんが展開されているものについて、それを踏まえたお話だったと思うんですけども、その『ハイ・イメージ論』っていうのは今まで何度か『海燕』っていう雑誌で見ると、『世界視線』とか『究極映像』とかいう言葉がでてくるんですけど、ちょっとこれはまあ本になら読もうかなんて思っていて、どうもどっつきにくいんで、まあ、恐らく最初からまとめて読んで読もうかなんて思っていたところ、機会があつて、ちょうど三週間くらい前ですね、全部、まあほぼ全部今までのぶん読む機会があつて読んだら、ぼくには非常におもしろかったんですね。『マス・イメージ論』もその前に機会があつて、一年くらいおいてもう一回読んでみました。これは一年前も読んでおもしろかったんですけども、だいぶわかんないところもあったんですけど、二回目読んだらだいぶわかりやすくなつて、何でわかりやすくな

なっているんだろうとー、えーと、これ、何分まで喋ればいいんですか。

瀬尾 あ、大体十分ぐらいいいんじゃないかと。

加藤 じゃ、あと五分くらいまで。

瀬尾 ええ、もう五分くらい済みましたから。

加藤 えーと、何とか五分もう終わりましたけども。それで、今回読んだらとにかく『マス・イメージ論』がだいぶおもしろく、読みやすくなつてたんですね。そのことであのー、ちょっとおもしろいと思つたのは、あのー、前にわかんなかったところがわかるっていうんじゃないかと、あのー、あまりその、まあ競争、五千メートル競争でいうと、トップランナーのあたりがわかるんじゃないかと、まあ方々というの、なかなかわかりにくかったようなものが、知らないうちにね、わかりやすくなつてくるなっていうのが、ぼくには不思議な手ざわりで残つたんですけども。それでこれはどういふことかなと思つたんですけど、いつのまにかぼくたちは『マス・イメージ論』の特殊な用語に慣れちゃつて、慣らされちゃつて、その力というかスピード、速やかに驚いたんです。それにはどういふ意味があるんだらう、ということですね。ひとつは吉本さんの言ってることの力、でしようね、もうひとつはこういう日々新たな領域でのコトバに対する感覚の、ぼくたちの抵抗力の無力なこともないかな、なんてことを思いました。

それであ、二箇所だけぼくわかんないところがありましたけども、五行くらい、やっぱり『マス・イメージ論』一年たつてもう一度読んでみて、そんなことを考えて、えーと、今度の『ハイ・イメージ論』を読んだわけです。この『ハイ・イメージ論』というのは、あのー、最初の入り口が非常に独特になっている、入り口に門があるんですね、で、その門にどういふ言葉が書いてあるかはわからないんですけども、とにかくその門を入れば、非常におもしろいです。ぼくはあのー、ですから何か、あのまあ、

ひとつは『国家論から都市論へ』っていう言葉を思いついたんですけども、その場合、昔も六十年代の末くらいに都市っていうのが一時話題にでてきて、今あのー、日本論、日本人論とか国際化論とか片っぽうにあつて、で、片っぽうに東京論っていうのがね、また、風俗的にですけども盛んになってますね。で、あのー、非常に軽薄なものもあつて、けしからんなどという見方もあるかもしれないんですけども、東京論っていうのは要するに都市論なんです。で、東京論っていうのがあんなにでけるところには、何かのアニメ、ペンヤミンのいうオーラですね、アニメ、何かのまあオーラっていうか何か働いていると思う。それには根拠があるだろうという考えなんです。で、『共同幻想論』と『マス・イメージ論』『ハイ・イメージ論』っていうのを並べてみると、その、柳田国男が『遠野物語』からやっぱり二十年くらいして『明治大正史世相篇』っていうのを書いているんですけども、あ、これは吉本さんの一種の『明治大正史世相篇』に当たるような、つまりそこにもね、国家論から、じゃないですけどね、共同体論から都市論へ、或る全体を構想するところから、かけらと全体との関係を構想するような具合に変わつてきてるってふうな感じを受けて、面白いな、これは何だろうって思つたんです。

まああのー、ぼく今さっき吉本さんのお話聞きながら勤勉にもノート、ていうか何かとつたにもかかわらず、ほとんどここに出る前から何も考え全然まともじゃなくて困つてたんですけども、あのー、ちょうど今さっきで話でいいますと、世界視線っていうのがぼくには非常におもしろかったことなことです。世界視線っていうのが、例えば植谷雄高さんてひとは『死滅した目』ってのを以前言われたことがあるんですけど、それと違うんですね、全く。似てますけども全く違う。で、あのー、さっきのお話の例、死にかかっているひとの例でいうと、意識が減退して要するに機械が壊れると、ひとつのベクトルがふたつの分力に分解できるっていうか、あのー、こういう矢印が縦と横、X軸とY軸でもいいですけども、一メートル五十くらいの目の高さ、あとどこからか垂直に降りてくるシャワーのような視線

に分かれる。そこで、まあ、ぼくなんかが近頃何か考えてきたようなことに、その一、見合うようなことをもつと構造的に言われてるような気がして、ぼくは非常におもしろかったんですけども。それは何でおもしろかったかというのにはちょっと時間もないし、ここでは今言いませんけども、あの一、そういうふたつの力の合成の逆ですね、ふたつに分けた形で世界視線というのを取りだされて、つまり元気がよかったらイメージとしてひとつの力なんですけども、死にかかったり機械が壊れかけたりするときに分かれる、分かれた片われとして世界視線というのを取りだされて。だから「死感した目」と違うのは、死にかかっていることに現実的な根拠みたいなのがあって、そこから世界視線というのでてるような、そのへんのところを、この八十年前後以降の世界史の中心の構造的な変化っていうふうなことと関係してですね、そういうふうな世界視線っていうものをそういうふうな形で取りだしてこられた。ぼくから見ると、そこにいまの「国家論から都市論へ」という動きの根拠がいちばんよく掴まえてられているということなんです。「世界視線」というのは、そういう意味では非常にダイナミックで魅力的なアイディアだということですね。いちばん小さなかけら、もう分裂しようのないアトムですね、それが壊れるときにすごいエネルギーがでるわけですが、世界視線というのは、かけらが割れて生まれたエネルギーなんじゃないかな、ということなんです。ことによるとこれは正確な読みじゃないで、いまの吉本さんのお話の聴き取りとしては誤読かもしれないんですけども、ぼくにはその誤読的部分がいちばん面白く思えました。

浦尾 それじゃもうひとり続けてお願いします。竹田さん、じゃ、お願いします。

竹田 竹田です。あの一、テレビなんか見ていると、あの一、落語家のひとが並んで、三題断というのをやっ、出題するひとがいてね、それで即興でやるわけですよ。ぼくらそういう訓練全然積んでないんで、三人共さっき控え室のなかで非常にプレッシャーが（笑）かかって、吉本さんの講演を三十分ばかり聞いて何か話をしろっていうふう言われたんですけど、あの一、大変困ってますけども。

えーと、ぼくこの頃ファミコン・ゲームにすごく凝ってるんですけど、相当もう、えーと、六つぐらい最後の最後までいっちゃって、あの一、高橋名人に今度挑戦してみようかなんて思ってるんですけど。あの一、きょうの話でぼくも大変刺激を受けたんですけど、ファミコンってのは一種世界像みたいなところがあって、旅行を結構苦いときから、時間があってぶらぶらしてたもんでいろんな所へ行くんですけども、最近思うのは、日本じゅうどこ行っても同じ風景になっていくのがあるって、そうすると、昔は旅行っていうのはすくおもしろかったんですけども、もうどこでも似たような風景しかでてこない。そうすると、すぐ近くの伊豆に行っても秋田に行っても何かどこか似てるなっていう感じがあって、そうすると世界というのは面白くないわけですよ。ところが、ファミコンっていうのはなかなか、コンピュータゲームなんですけどおもしろいところがあって、えー、シミュレーションでまあいろんな像をつくるわけですよ。で、あの像というのは風景、日本の風景と違って想像でいろんなものをつくるわけですから、相当違う世界をどんどんつくっていく。で、しかもあの、そこで探検するなりお姫さまを助けたりとか、それから宝の箱を探したりとかいろいろやってどんどん進んでいくわけですよ。で、なぜかぼくはああいうのすごく凝っちゃって、今凝ってるのは任天堂のバレーボールというやつなんですけども。昔、テニスゲームというのがあって、それはあの、何ていうのかな、玉がどこにきたかというのと、それを打ち返すタイミングが難しいんですけども、あの、一晩じゅうやってるんですよ。次の日原稿があるにも拘らず、夜ごはんを食べてから朝の十一時ぐらいまでやってる（笑）なんてことが何回もありまして、あの一、すぐに上達するんですけども、その任天堂のバレーボールというのは相当複雑なんです。で、いっぺん、こんなものはコンピュータに勝てないようできてると放りだしたんですけど、やっぱりやってみると相当複雑でだんだん進んでいく。で、これは世界の構造に非常に似てるなっていうふうには思っています。つまり、先の場面へ行きたいんですけども、或る課題を克服しないとその先の場面というのが見えてこないわけですよ。で、あまりにも

困難すぎると駄目なんですけども、ちょうどこう努力をすれば行けるということになると、どうしても先の場面が見えなくなる。編集者のひとに怒られても、どうしても（笑）きょうじゅうに次の場面に行きたいという欲望が胸の奥からどんどん深まってきまして、つい向かっちゃう。それと人間が世界を経験していくっていうふうな感触っていうのは、非常に似ているところがあるな、欲望と世界の構造も非常に似てる。ところがあんなにふうなことを思ってたんですけど、ただひとつだけ違うところがあるんですよ。突然難しい話になるんですけど、フッサールというひとが言っていて、このひとは簡単に言いますと、それまでは人間の認識と世界の現実っていうものが対立して、世界の現実を人間の認識はどういうふうにとらえるかっていうふうな考えられていたんですけども、そういう対立は全然ないんだと、全部世界像なんだっていうふうなことを非常に面白い言い方で、まあ、そういうことを言ったひとはいろいろいるんですけど、ぼくの考えではフッサールというひとが一番はっきり最後の最後まで言っている。つまりこれは究極の世界像理論だっていうふうな、ぼくなんか思ってるんですけども。あの一、フッサールというひとはそういうことを考えたわけですよ。ところがフッサールのあとにハイデッガーというひとがでてきて、またちょっと違うことを言う、フッサールの方法をそのまま使ったと違うことを言ってるわけですよ。で、ぼくは最近あの一、実存転向主義者とかいろいろ言われてるんですけども、（笑）、実存という考え方をハイデッガーがだしてきたんですよ。で、この考え方は、さっきのファミコンのゲームのことで言いますと、まあさっき言いましたように世界っていうのは先が見えない、見えないんだけども一定の手続きを踏んでいくと、まあ少しずつ向こう側が見えてくる。そこへ行きたいという欲望がこっち側にたけりたつというふうな、そういう構造になってるんですけども、ファミコンの世界ではどうしても人間が生きていく欲望と世界との関係に对应できないものがあるわけですよ。それは何かかって考えますと、まあ、たぶん死、死ぬってことの死っていう問題じゃないかってふうに、ハイデッガーというひとは考えたと思うんです。というのは、スパーマリオブラザーズって

いうのがありまして、知っているひともあると思えますけど、びんびん飛び石を跳んでいくわけですよ。で、かなりいい線までいって、もうちょっといけば次の画面に届くんだけれど、びゅつと落ちてちるとまた元の場面まで戻らなきゃいけない。そうすると、やっていると何かもう手に汗握って、崖から落ちると、自分が崖から落ちて死ぬような切羽詰まった感触になるんですけども、あの一、ファミコン・ゲームでは失敗したらもういっぺんやり始められるわけですよ。ところが、人間の世界の関係ってのは死んだらそこで終わり、どうしてもやり直しがきかないっていうふうなそういう項、そういう項目っていうのが入ってるわけですよ。で、そういう項目が入ることによって、世界像と欲望の関係っていうのは、ファミコンのなかで世界の模像を見る、経験するっていうことと全然違った質を導くはずだっていうふうなことを、ハイデッガーというひとは考えたと思うんですよ。で、それがまあ、ハイデッガーの実存という概念で、もうちょっと言いますと、つまり世界像っていうのは、人間の頭のなかにある世界像っていうのはいろいろな形をとっている。で、それはひとつの考え方をどんどん詰めていってどういいう世界像の形をとっているかっていうのは、ほとんど押し広げて考えていけるんですけども、そのなかだけでは実存という問題はでてこない。実存ってのは、取り返しがきかない、あるいは死んじやたらもうゲームは続けられないっていうふうな項目であって、それは人間だけが持っている。で、そういう問題を導入してきたときに初めて人間と世界像の関係っていうのは、またフッサールが言ったような関係ではなくて、ちょっと違った形で見えてくる。

ぼくなんかさっき吉本さんの話を聞いて非常におもしろかったのは、あの一、吉本さんは、えーとこれはぼくの我田引水的な理解ですけども、ぼくはひそかに自分が思っていることというのは今までの思想の脈絡からいえば違ったことをやってみるんじゃないかっていうふうな思ってたんですけど、吉本さんはもうそういうことほとんど射程のなかに入って考えられてるなっていうふうな気を強くしたんですけども。人間の視線には水平の高さからの立体像と真上からの視線があるっていうふうなことあって、そ

れて世界像というものの全部いわば極限までおしていきけるんじゃないかっていう考え方があって、非常に刺激を受けたんですけども。あのー、ぼくなんか思うのは、実存の視線ってのは、いわば下から見上げてるような人間のもうひとつの視線っていうのがあって、これは映像、いわゆる機械的な映像、シミュレーションとしての世界っていうふうなものにはどうしても再現できない。いくらコンピューターやそういうものが進んでも、その視線っていうのはちょっと独特のものである。で、しかもその視線っていうのはやっぱりぼくらがああ、たぶんこれから人間が世界を理解してゆくときに、吉本さんが言われたような、世界像としてあるいろんな要素を極限化してゆく、それで全部範型をつくっちゃってというふうな考え方がどんどん進むと思うんですけども、そのときにそれをまあ、一種そういう視線を解体するっていうか、吉本さんが「脱」といって言う方で言われたわけなんですけども、あの、これも我田引水的に言うんですけども、そういう視線があるとしたら何かさっき言った死っていうふうなものもどうしてか聞かれないだろうか。ぼくはもうひとつ、死っていうことってのはただ単にやり直しがきかないってだけでなくて、どうしてもやり直しがきかないっていうふうなことになる。逆に対立として、これができたらもう世界と自分の命とを引き換えにしてもいいっていうふうな、そういう項も出てくると思うわけですね。で、あの、そういう人間の存在の視線っていうのは、やっぱりシミュレーションのなかでの世界像だけでは考えられない。あのー、まあそんなことを漠然と考えてました。それでまあ、死っていうものを超越ってというふうな形で考えてきたんですけども、そこらへんでいう、えー、何か時間がどのくらいたったかわからないんですけども、あの、きょう吉本さんが言われていることに非常に刺激を受けて、またいろいろ新たに考え直してみようかなって思ってる場所です。どうも。

瀬尾 どうもありがとうございます。今二人の方からお話をいただいたので、ちょっとここで吉本さんに話していただこうかなと思うんですけど、ぼくは、司会者は結構真面目に聞いているようで、メモなんか

一四

一五

結構とつてから理解するように見えるけど、さっぱりわからなかったもんですから（会場笑）、加藤さんの話でもやっぱり世界視線っていうのが非常に興味をひく部分だっている話で、竹田さんのほうでも、ファミコン・ゲームのほうから入ってフッサー、ハイデッカーを遊んでやったり世界視線といたるところにいったんでないかという、何かよくわかりませんが、そのあたりで、ぼくがさっき吉本さんのお話を聞いてた限りでは、世界視線っていうのにもちょっと新しいこと言われたんじゃないかなって思ったのは、「権力視線」っていう言葉を使われたのが印象的だったんで、あのー、世界視線は権力視線でもありうるんだって言われた。で、それたぶん竹田さんとの対談のなかで、吉本さんは自分の世界認識の仕方っていうのは「ベースアイ」っていうか、鳥の目から俯瞰するようなそういう視線をとる傾向があって、それはひょっとすると権力的な視線に転化する可能性があるんじゃないかっていうふうな、ちょっとひょっとしてさうとすると、そういうところと絡めて、ぼくは興味があったもんですから、加藤さんの世界視線ということ、それからあの、そういうことと絡めて、吉本さんのほうからひとことお願いします。

吉本 あのー、確かに竹田さんとの対談のところで、つまりぼくはわりと上のほうから何か全体をかぶせるみたいな思考方法っての、これは何かマルクス主義の悪影響のような気がするけど、それをわりと得意なんだけど、ほんとはあまり好きじゃないんだって、否定したいんだみたいなことを確かそのときぼくは言ったんじゃないかと思うんです。だけれども、上からっていうことも、つまりきょうの言葉でいえば「究極」なんですけれども、或る人間的な高さっていいですか、到達点以上の高さまで行っちゃえば、つまり無限遠点からの上からの鳥瞰視線といっちゃいましょうか、ベースアイまで行っちゃえばそれは逆に権力を無化する視線っていうふうになりうるんだっていうふうな思ってる、みたいなことをそのとき申し上げたと思いますし、きょうもそういうふうな申し上げたと思うんです。つまり現在の世界権力ってというのは、数十万キロの上空のところで戦いを演じてるって感じなんで、まあ無限遠点とはほど

違いわけですから、それはまたそれを無化する、無限遠点からの視線っていうのは無化する視線でもありうるんじゃないかと思えます、みたいなことを確かそのとき申し上げたんじゃないかなっていうふうに思っているわけですね。だからあのー、自分の方法っていいですか、方法を崩していく行き方っていうのがあって、その崩し方をどういうふうな崩すかということになったら、極端に言えばそのー、竹田さんの言われたように下からの視線っていうふうな、全部下からの視線にしちゃってというふうな崩し方も勿論あるわけですけども、上からの視線を、何ていいますかね、現在の権力視線みたいなものよりはちょっと無限遠点においちゃえば、これはひとつ崩すやり方でもありうるんだっていうふうな崩し方もあるわけですね。だからどちらからでも可能じゃないかなっていうふうな、ぼく自身が思っているっていうのが現状なんですけども。

瀬尾 あのー、ファミコン・ゲームなんかに関してはいかがでしょうか。

吉本 ぼくはあのー、やったことない（会場笑）んですけども、あのーつまり、この頃は（笑）高度になっちゃったんですけども、ぼくなんかゲームセンターみたいのに行ってたときにはもっと程度が低いといましようか、単純なアレだったもんですからまだやれたんですけども、ちょっと或る時期からそういうのがぼくらには追いつけなくなっちゃって、やってもこれは駄目だっている、で、まあ手を挙げちゃったというのがぼくなんかの経験なわけですね。だから今の高度な、しかもファミコンの形で流布されているっていうか、はやってるものがどういうふうな程度で、我々がやるとどの程度くっついていけるのかなっていうのはよくわかんないんですけど、或るところからゲームセンター通いもやめてしまった（会場笑）っていう（笑）状態なんで、またチャンスを見つけてせいじや（会場笑）竹田さんが今苦しんでいるところをやっぱり（笑）苦しんでみたいというふうな思いますが、今のところはまあそんなところですけども。

瀬尾 はい、どうもありがとうございます。そういうようなわけですので、えーと、あと二人の方に続け

一六

一七

成田 さっきからいつ指名されるか待ってたんですけど、この一週間ばかりきょうのために学習してまいまして（会場笑）、えー、その成果がこの手帳にびっしり（会場笑）書きこまれておまして、きょう吉本さんの前で御報告できるというのが（会場笑）非常に幸せなんですけど。えー、普通部屋で理論的なことをやるってなると、北川透さんとかが角谷道仁さんとかってなるんですけど、どういうわけかわたしにここに座ったかどうかということになりまして、えー、そういえばわたしは部屋では正式に学術担当というのを致しております。これはほんとの話なんです。

で、大体狙いが若手の論者っていうことになってるわけですね、若手の論者っていったって今皆四十前後のひとばっかなんですけど、そうしますとぼくもその世代っていいですか、同じ一九四七年生まれですから同じ世代に入るわけですね、まあ同輩の世代ということになるわけですね、これはあのー、全共闘世代とかって、まあそういうこと言って頑張らっしゃる予備校の先生もいらっしやいましたけど、まあそういうわけですね。で、きょう吉本さんの話を聞いてわたくしが思ったのは、やっぱり吉本さんは超空想的な社会主義者だあっていう感じをもちました。これは鋭いひとはもって前から思ってたかもしれませんが、あのーそういう感じをもちまして（会場笑）、といひますのはあのー、わたしなんかあのー、世界視線といたってこれ、ローカル視線ばかりです（会場笑）、ほんとは（笑）。そうするとそのローカル視線からきょうのお話ちょっと横でメモをとらして聞いていたけど、これは大変な話になってきたなあ。ただひとつわかったことは、吉本さんが北川さんとの対談のところで、これはことについて云々したときに、「中部山岳地帯では」ってな表現が確か（会場笑）『現代詩手帖』ではありまして、これ読んだとき、吉本さんは地図知らないんじゃないかって（会場笑）、名古屋と豊橋と

かウーンと思つてただけで、これはやっぱりランドサットの世界視線から見ると(会場笑)、さっき地図が貼つてありましたが、ウーンなるほどこれは「中部山岳地帯」だと(会場笑)、なるほど吉本さんはここまで、もうその頃こういう考えをピチッと、これでくくられちゃうと。で、究極的にはもう筒屋ついでのはもし何か残るとしたら、中部山岳地帯の詩誌であつたということにたぶんなるだろうと思ひます。

えー、ぼくらの世代ついでのはちやうど全英蘭時代といわれてる、まあどうしても語りますとなくかしさがでてしまふひとたきさんいますんで、これはちよつと懐しむとしても、大抵親しい仲間なんかもそうですけど、大抵吉本しか読まずに卒業してゆくついでにうろくでもない奴が、或るいは横滑りしていつてしまふついでのがたきさんいましたけど。えー、ぼくとしてはひとつ聞いて、ローカル視線といふものは名吉屋で生まれて井戸で育つて、えー、今は口進町にいますけど、もうここしか(笑)知りませんで、東京も鮎川信夫さんにインスピレーションに浦尾さんと行つたときに最近では行った、そのあと一回ぐらゐ行って、よく知りませんで、あの一、そうするとローカル視線ついでのはどういふふうになるのかなあ、世界視線に比べては、ついでいふことがちよつとお訊きしなさいけんじやないかなつて気がするわけです。で、あとでぼつりぼつり訊くついでに手もあるんですけど、大体わたしは思ひついたことを先に言つてしまふと、あとで笑われるより先に笑われてしまふついでに心構ですの、先に質問といふか、吉本さんにお答えいただければ嬉しいんですけど。あ、先ほど科学技術のお話がありまして、それから世界視線を獲得するには死後のイメージとか密教的なイメージがあるということがありまして、で、もうひとつ科学的なそういう視線ついでにと言われまして、そうしますと科学技術をバックにした視線のほうが、三つある視線のなかでは優位なんでしょうか。あるいは何かこう、そういう必然といひましようか人間にとつて。そういうのあるのかな、俺は密教視線でいくんだつてい

一八
一九

うひとがいたら、それはそれでいいんじゃないかつていう気もするんですけど、ここらはどうなつちゃうのかなつていう感じがいたしました。ちよつと理論的になつてきましたね(会場笑)。

それからあの、これは講演を聞く前から考へてきたことなんですけど、世界都市つてものがあつたら、これは、天皇は、皇居つてのがありますけど天皇つてのはこれ、霞ヶ関のビルか何かに入つちゃうのか、これはどうなつちゃうんだらうかつていう、それを何か心配するんですけどね(会場笑)、わたくしは至つて保守的な人間ですもんで、子孫に美田を残せつていふこと言ひまして浦尾さんによくからかわれてますけど。それから、もうひとつとしては、ま、同じようなことかもしれせんけど、特殊浴場とかそういう場所がありますね、悪場所つてのが。そういうものは世界都市にどうつての、何かを異化作用してるのか、あるいは嗜好なのか知りませんが、そういう場所つていふのはどうなるのかなあ。そこらをお訊きたいなと、ちよつとぼくらしくないことを言つてしまつて(会場笑)じゃ(笑)どうも。

浦尾 どうもありがとうございます。まあ、成田さん橋爪さんといつてからと思つただけで、成田さんからちよつと予想以上にあの、高度な質問がでつてしまつたので(会場笑)、別名「ローカル成田」つていふふうと呼ばれてるわけですけども。あの、ローカルな視線つていふのはいつたいどうなるのかと、それから世界視線における科学的の優位が云々かんぬんとかいふ話がありましたけど、まあそんなとこです。それから世界都市において皇居あるいは特殊浴場(会場笑)のあり方はどうなるかと(会場笑)。で、やっぱりちよつとこれは吉本さんにあの、ここでちよつとひとこと言つていた

吉本 わかりました。まず最初の、ローカルな視線はどうなるかつてことなんですけども、これは、世界視線から見たローカルな視線つていふのは区別がつかないんじゃないでしょうか。つまりローカルであるか中央であるか、あるいは社会主義国であるか資本主義国であるか、国境がどこにあるか、なんていう

のは全部区別つかないで同一視されてしまうから、それは区別つかないんじゃないでしょうか。あるいはもつとあなたに、どう言つたらいいんでしょう、好まれる言い方をすれば、すべてはローカルな視線だつていふことになつてしまふんじゃないでしょうか。つまり、どこが中央でどこがそうじゃないかというところじゃなくて、もう、このランドサットみたいな数十万キロでもいいんですけど、もつと高い所つまり無限遠点から見た世界視線から見れば、全部がローカルだ、それからまた全部が中央だつて言へば中央であるといふふうには、つまり、区別がそういう意味でいへばなくなつてしまふ視線じゃないかなくて、ぼくはそう理解します。それからえーと、あの、科学技術的な視線と究極映像つていふ問題でお話したことに関連するアレなんですけども、密教の視線といふものとはどちらがいいのか、あるいはどちらでもいいんじゃないかつておっしゃいましたけど、ぼくもどちらでもいいと思ひます。つまり好みの問題としてはどちらでもよろしいんじゃないか。それで現に、どちらが好きだつていふのもいいし、どちらが嫌いだつていふのもいいわけなんです。ただ要するに、ほかのことでもそうですけども、ほかの例でもそうなんですけれど、科学技術が実現した視線から密教視線を批判したり、あるいは否定したり、あるいは密教視線から科学技術的な視線を否定したりつていふ否定の仕方つていふか、とり方つていふのは意味がないつていふふうに考えます。つまり、そういうふうにはアレスすると、原始的な生活と電化された生活とどつちがいいんだつていふような、非常に通俗的な対立の問題になつてしまつて、それは現にたきさんのひとがやるわけですけども、しかしぼくはそれは不毛であつて、つまり言つてみれば一種の楕円、ふたつのつまり、本来的にはひとつに重なるべきなのかもしれないけども現在の過渡的な段階ではふたつの中心をもつていて、それが相互に円を描いて世界をつくつていふ、みたいなふうな考へるのが最も妥当なように思ひます。だからどちらがいいかつていふ比較の仕方自体は、好みの問題としてはどちらでも結構です、よろしいじゃないですか。つまり、俺は原発発電の世話にはならんといふんだつたら、中部山岳地帯に(会場笑)入つてい

二〇
二一

こでランプの生活をされればいいわけで、つまり個人が好みの問題としていふんならばどんな生活をしてもいいわけなんですし、ぼくも原始生活してみたいなあ、一年のうちいくらかはしてみたいなあと思つたりしますから。思うと、ぼくはそうしますし、そりやもう好みの問題としてならどうあつてもいいわけなんです。ただ現在多くやられてるような、どちらかの視線からどちらかの視線を否定するみたいな、そういう対立の仕方あるいは対比の仕方は不毛であるといふふうにはぼく自身は考へています。

それから天皇はどうなるでしょうかとつていふことなんですけども、天皇つていふのは、いづれにせよ古代の数百メートル、先ほどの比喩でいへば数百メートルの丘の上から自分の統治してる直轄の村落を眺めて、ああ、民は賑わつてる、かまどは賑わつてるとか賑わつてないとかつて言つたところから発生して、まあ近代あるいは現代、まあ敗戦までそういうふうな支配つていふのを、政治制度の支配をしてたんでから、こんなものは世界視線から見たら支配被支配の意味をもたない、もたなくなつちゃう存在だと思ひます。つまり、それ以上の意味は何もないつていふふうにはぼく自身は思ひますから、それ以上どうなつちゃうんだらうかつていふ御心配だつたら、やっぱり御自分で御心配なさつて(会場爆笑)、御自分で対策をたてる(会場爆笑)つていふふうにはされる以外ないだらうつていふ、ぼくはそこまでは関心がないので(会場爆笑)、世界視線のひとつの理想視線からみれば何の意味もないんだつていふ、天皇がどうなるかつていふことなんか何の意味もないんだつていふふうには、ぼくはそういうふうな理解をもつています。

それからもうひとつ(笑)、特殊浴場とは(会場笑)どういふことかつていふ、これはぼくは東京でいへば歌舞伎町つていふのが典型的に、(司会者のほうを向いて)そういう意味でしようね(「そうです」浦尾)、は、(会場笑)、典型的にそうだと思ひます。それでぼくそういうこと喋つたことあつて、喋つたら皆シーンとなつちやつて仕様がなかつたんですけども、あの一、歌舞伎町つていふのは大変興味深く思ひます(会場笑)。つまりあの、本格的にその、何かフィールドワークで本

格的にしないといけないんじゃないかっていうふうに思っている(会場笑)んです。ただ、このフィールドワークっていうのは、言ってみれば大石内蔵助が祇園で遊んで、これは敵の目をこまかすために遊んでんだって(会場笑)いうのかね、本当におもしろいから遊んでるのか(会場笑)、つまり、どちらかっていうの区別することはできないし、どっちだっていうふうに言い張ることもできないんで、本当は本音を言えば両方だということに(会場笑)、まあ、大石内蔵助の場合もそうなるわけで、つまりこれはやっぱりそこを追究するとそうなるんじゃないかっていうふうに(会場笑)思うから、なかなか条件が揃わないとできない(会場爆笑)っていうふうに思い……ただ表面だけはよく、ちょっとと表層ではちょっとしたことあるんですけど、たいしたことねえんです、要するに覗き部屋みたいのをしたことあるんですけども(会場笑)、あー、それ自体は非常に興味深かったんですけど(会場爆笑)笑)、あー、で、何が興味深いか(笑)と申し上げますとね、つまり旧来、つまり戦前までの、あるいは戦後すぐぐらいいちそうあったんですけど、戦後すぐぐらいの、つまり高度成長期以前の日本では、要するにその種のアレは、例えば東京で言えば吉原であるとか、うーんその何か、向島であるとかいろいろな所、幾つかのその何ていいますか、そういう遊廓地帯みたいなのがあったって、そこで性的な遊びっていうのが行われ、また性的な商売っていうのもその一画で成立し、っていうふうになつていいたと思うんです。それでそれは典型的に例えば永井荷風の小説がよくそれを表現していますけれども、まあ、そうしますとそれは、行きましたと馴れ馴れしいようなものがありますけれども、馴れ馴れしいか、ええそれはストリートに性的な行為が、性交行為が、性的な行為がストリートな目的であつて、それに対して金銭を払い片づけば金銭を取つてついでにそういう関係なんだけれども、ぼくがちょっと見ました歌舞伎町における性っていうのは、そんな単純なものじゃなかったように思います。つまり例えば覗き部屋っていうのを例にして言いますと、覗き部屋の中央にヌードの女のひとがいるわけで

二二

二二

すけども、それで各人は仕切られた覗き部屋でそれを覗いてるわけですけども、そうすると中央のひととは様々なポーズをとってられるわけですよ。けれどもそれは、そのひとの側から覗いてるひとが見えるかどうかっていうと、ぼくはたぶん見えないんじゃないかと思つてるわけですよ。だからたぶん様々なポーズを真ん中でとつてるその女性自体は、あの何ていいますか、つまりもし慣れつてしまふ意識しなければ、自分は性的、何かそういう性的にいやらしいか何か知りませんけどとにかく、欲望の目でもって見られてるんだってことを意識しないでそういう様々なポーズをとるんじゃないか、慣れるととれるんじゃないかっていう、第一にそれがものすごく複雑な気がしたんです。それから覗いてるほうっていうのは、まあ学生さんみたいなひとが多かったけれども、あー、つまり覗いてるほうも、何ていいますか、つまり吉原へ行つたとか鳩の街へ行つたとか、つまり永井荷風のいわゆる遊廓遊びですか、そういうストリートなものじゃないから、自分はおの、何か悪いことをしてついでに言つたらおかしいんですけど、つまりストリートな性行為をしてるっていう感じなしにたぶんすむんだ、っていうのがぼくの理解の仕方なんです。そうして、各部屋を回つてくる女のひととは別なひとなんです。それで各部屋を回つて、要するに何ていいますか、あー、回つてきて要するに、いかがですか、覗き部屋はいかがですか、っていうふうな(会場笑)言つてみながら回つてくるわけですよ、それは要するにあの、要するにマスターベーションの手伝いをしますよっていう意味なわけですよ。で、そういう女性が回つてくるわけですよ、それは真ん中でヌードでいるひととは全然違うひとなんです。だからそれでもやっぱり一種の自分はストリートな性行為をしたっていう、そのストリートさっていうのをその女性のひとにも感じなくすむし、覗いてる男のお客さんのほうもそれを感じなくすむっていうふうになつていふと思つてます。そうするとこの性のこの関係っていうのはそれだけ見たものすごく複雑なわけなんです。複雑だと思つて理解し解釈したわけですよ。だからぼくはウェーッと思つて、やっぱり世界都市だなあと思つたね(会場爆笑)。つまり、あー、そこでの性自体っていうのは、つまりこれはちょっと

と微妙だから誤解しないでほしいわけですよ。わざと誤解するひとは例えば、あの野郎けしからん、性を商売しているところについて肯定的な言辭を弄して、みたいなことを言うひとが必ずいるわけですよ、そういう意味じゃなくて聞いてください。つまりそのこと自体の構造を今説明してんだって(会場爆笑)笑)ふうんと思つてください。つまりこれは中立で、いい悪いじゃなくって解明してるんだって。そうするとね、その性の間接性っていういふふうか、間接性が積み重なつて覗き部屋っていうのはできていくとぼくは理解するわけ。つまり単にそれだからそれだけのことで、旧世界における旧東京っていうものもついていた遊廓のイメージみたいなものとまるで違ふんで、だから、まるで違ふんで、やっぱりぼくはね、これはちょっと相当すごい所だな、やっぱりすごいことになつてんだな、あつて、わづかに表層をアレスした(会場笑)段階でぼくがそういうふうな理解したわけですね。だからもつと内部に入つていいたら、もつといろんなことが言えるんじゃないかっていうふうにはぼくは考えますから、やっぱりこれは本当に専門家のひとで大石内蔵助になつてもいいっていうふうには思つてる方がおられたら、やっぱりやつて、そのレポートがあるんなら(会場笑)ぼく聞かしてほしいみたいなふうな気がぼくはします。ただぼく自身の探索っていういふふうか、理解はそれ以上今のところ及んでないんですけども、ぼくはこれ相当複雑な、性っていうものの、人間の性っていうものの、まあ、商売つていえば商売、売買つていえば売買、あるいは産業つていえば産業なんですよ、それはかなり複雑なことになつてつていふのがぼくの理解で、ぼく自身はもつと奥底までつこまないと本当の否定と本当の肯定つてはできないなあ、どちらでもないっていうのがぼくの感想理解なんです。一応これで。(会場笑)(会場拍手)

浦尾

すこく良かったです(会場笑)。ほんと「菊屋まつり」やつて良かったっていう。あー、じゃあ、また今度何がとびだすかわかんないという橋爪……あ、それで、くつろいだ雰囲気いやがうえにもなつてきているから、いろいろあの、さっきからビールがばがば飲んだりなんかして、ト

二四

二五

イレなんか行きたい方も講師のなかにもいらつしやるかもしれませんが、あー、適当に、まあ例えば成田さんが発言されてるときとか(会場笑)、トイレでも行つていただければ結構です。それじゃあ、何がとびだすかわかんない今度橋爪さん、お願いします。

橋爪

えーと、橋爪ですけれども、何か野暮なことを言ひそうだとおっしゃるんですけど、成田さんにも、えーと、あー、「脳軟化」とか何かそういう噂がございまして、それであー、もしそういうアレだったらどうしようかなあと思つて心配して(会場笑)笑)まいましたところ、全然そういうこともなく、非常に安心しました。それでわたしは社会学なんかやつてる者でして、実は文学は非常に疎いのでして、こういう詩人の賑々しいお祭りに座つて居るのは何か間違ひじゃないかと思つてます。ですから文学のことはさっぱりわかりませんので、こういうことは吉本さんのことはほとんどわかりませんので、えー、少しは読んでるんですけども、わかんないなと思つていますので、たぶん変なことを言ひますが、うーん、まあいろいろ疑問に思つて居ることはあるんですけど、ひとつだけお尋ねしようと思ひます。

何か「現代詩手帖」という雑誌でまた今度吉本さんの特集をされるとか何とかいうので、わたしのところにもお鉢がまわつてきまして、それで「ハイ・イメージ論」とかいろいろ読ませていただいたんですけども、きょうお話を伺つて大変おもしろく、ま、これを聞いてればあーいふまじいことは書かなかつたのにと(会場笑)笑)思つた部分もありましたが、まあいろいろ生意気なこと書かせていただきましたけども、あー、権力つていふことをおっしゃいましたね。世界視線つていふことが権力視線だつて、で、視線のとり方というものが権力に非常に関係あるんじゃないかと。で、権力つていふことはとても気になつていふ以上になつて、えー、まああの、わたしの考へて居ることのなかでは重要な

ことなんですけれども、で、吉本さんのお仕事にもいろいろありますんで参考にさせていだいてるんですけれども、ひとつわからないのはですね、えー、いろいろ考えているうちにですね、わたくしは権力をちっとも悪いものとは思わなくなりましたね。むしろ権力というのは在るものだと。この性質をよく調べてですね、使いなすといえますか、それを悪い、あるいは死滅すべきとか、あるいは少なくしようとか、まあ、そういう発想をすんなりといいたいものか、なあというふうに思っています、えー、つまり権力についてわりあい肯定的になってきているわけですね、それは昔学生の頃にですね、「共同幻想論」なんかを読みまして、あるいはマルクスなんか読みまして、まあ、権力が死滅するのだとかいろいろ書いてあって、わりあい真面目にかまどきにそういうふうな考えでいたことから見るとだいたい違ふ場所に来ているような気がするわけですね。えーと、権きょうのお話と少しそういうその、権力を肯定するといふ要もあつたように思われるんですが、権りというのは悪いのかどうかというニュアンスをですね、ひとつ伺いたいなど、で、そこが違ひますから、古いヴァージョンといいますが、ちょっと前までの吉本さんの体系というのはそういうものがひとつの柱になっていたような気がしますので、わたしの考え方とずれているといえますか、えー、そういうことです。

それでですね、じゃ、権力についてはですね、どういうふうなアプローチしたらいいかってというのは、まあいろいろ考えて難しいんですが、権力ってというのはイメージということでは追いきれるのかなあといふのがきょうのお話を伺ってまた考えたこととして、権力ってのはやっぱり何がしかのその、物質性ですか、こういう（こぶして机をコツコツと叩く）その、何ていうか、イメージと対極的なものっていろいろあるかもしれないんですけど、例えば食事をするっていうのはイメージの問題以上に何か或る物質性っていうのがあると、まあ、古い言い方でですけどね、物質性ってこと言わなければ事実性でもないんですけど、こういうことが起こったと、こういうことは起こらなかったと。これは反対のことはイメージ

できるけれども、事実っていうのがあるとするですね、それはイメージではどうしようもないんじゃないかと。で、そういう物質性とか事実性っていう世界がイメージのほかにあるとしますとね、まあ、そういうのは非常に堆積してまして、我々がここにいてか何かを捨ててですね、部厚い基底をもつてるんじゃないかと。ひと口でいうと歴史ですけども、そういう歴史とか事実の堆積っていうのが我々の現在をつくつてると。あるいはそのうえに、はじめて我々のイメージの世界というものが、広がることができるとはいえないかと。ですから、是非きちんと権力のことを考えたいな、って思った場合にも、あー、イメージ論ってすばらしいけど、ぼくは別な方法でやりたいなというふうを感じる部分があるわけですね。

それから経済学のこと何かイメージでなるといふことで、これも非常におもしろいなあと思いたした。例えば、商品っていうのはですね、効用とか、あるいはユーティリティとかいろいろアプローチできるけど、そうじゃなくてイメージなんじゃないかと。商品価値じゃなくてね。っていうことありました。で、商品はね、確かにそうだと思うんですが、もともと商品っていうのは、実際飲んだり食べたり生活に役に立つからというところで使ってるんですが、消費社会化したりですね、どんどん生産のほうが高くなってくれば、何の役に立つかわからない、はきりしないというふうなものを、いろいろなかで欲望の対象として売りこまなければいけないわけですね、ま、イメージ化していくわけですね。で、よく考えてみれば、商品を生みだすものというのは、えーと、むしろ資本というもので、簡単に言くと、イメージ化できなくてですね、我々の存在っていうのをむしろ含みこむような感じになっていくと、商品っていうのをイメージ化できるとしますと、ま、我々っていうのがあって、そのイメージのなかにこういう物質っていうの、物質じゃないと考えると商品、あ、イメージと考えるとですね、そういう世界に生きるってことはできるかもわからないけど、そうじゃないわゆる労働といえますか資本と

いいですか、そういう物質や人間の配置ってのもあるわけけれども、そういう論理っていうのはですね、全部イメージで解きまされるのかなあっていう気もしてね、そのへんも伺いたい。だからその一、権力っていうのはイメージである以上に、そういう事実とか歴史とかフアクチュアリティのレベルの分布の問題であつてね、えー、両方ないといかんのじゃないかなって、ちよつとだから、ま、唯物論と観念論みたいになりましたけれど、そんなことを考えました。ほかにもいろいろあるけど、時間がかかるばかりですから、このあと。

瀬尾

はいはい、どうもありがとうございます。とても明晰に質問していただいたので要約する必要もないと思いますが、だいたいまあ二点だと思えますけど。前提として権力は悪なかっていうことと、それからすべてを統一する理論的な骨格っていうのをイメージっていうので全部覆えるのかっていう、だいたいその二点なんだと思えますけど、よろしくお願ひします。

吉本

はい、この権力についてはぼくが自分で理解してる限り、あの一、橋爪さんの方がずっとよくやっておられるから、まあ、あんまり申し上げることもないんですけども、お答えできるかどうかは別として、少し違う経路からぼくはずっと自分がやってきましたから、少し理解の仕方が違うそこらからいきたいと思えます。で、まあ、初めに、ぼくは脳軟化症（会場笑）（吉本笑）っていうお話ができましたけども、最近浅田彰さんがよくそういうことを言うんだだけ（笑）（会場笑）、ぼくはちよつと浅田彰よりぼくの方がぼけてないって（会場爆笑）いうふうには、ぼくはそう思っています。例えば浅田彰が権力じゃなくて、その、何ていいますか、つまりこれは壻谷雄高さんと同じで、つまり、日本資本主義の繁栄っていうのは第三世界みたいなもの貧困あるいは搾取のうえに成り立っているのだから、そうじゃないって、関係ないって、関係ないって、ぼくは浅田彰のいうことを、だから吉本はおかしいことを言ってるって、そういうふうな言ってるわけですね。ぼくは最近そう言ってるのを見ましてね、で、とんでもねえ奴

だと思つて（会場笑）、早速何かで書いて言つとききましたけどもね（会場笑）、書いてきましたけどもね。ぼくはそうじゃないと思つてるわけですね、つまり第三世界における、つまり橋爪さんへのお答えのひとつにも関わらずに、ぼくは、あるいは国家・権力っていうのがあつて、ぼくは悪であるか善であるかかって、っていう問題を内在的にはもう少し違ふ説明をいたしますけれども、これを一種の世界権力としての国家権力っていうのは悪であるかどうかについていえば、ぼくは悪だといふふうには、現在において悪だといふふうには思つて居るわけですね。ですから第三世界におけるもしいつて、貧困なひとがいたとしたら、その第一責任はその第三世界のその国家の、エチオピアならエチオピアの国家の権力に第一責任があるといふふうには思つて居ます。それから第二責任はどこにあるか、つたら、日本国国家の権力を占めて、つまり保守政府っていうものに、これは進歩権力でもかまわないうふうには、要するに日本国国家権力に第二の責任があると思つて居ます。それでそのあけに最後に、要するに我々日本国の大衆についていいますか民衆に、もし責任があるとするならば責任があるといふふうには思つて居ます。ですから大衆の繁栄、日本資本主義の発展に伴う日本国における民衆の繁栄っていうものは第三世界の搾取のうえに成り立っている、っていう言い方はぼくは間違いだと思つて居ます。つまり大ざっぱに言うときはそれでいいですけど、本当はそうじゃないのであって、要するにそれには中間、要するに第三世界における国家権力、それから日本国における国家権力、そりゃ日本がもし進歩権力なら進歩権力でいいわけですけど、社会主義権力なら社会主義権力でいいんですけども、それに責任があつて、最後に一般大衆に責任がある、つまり責任がかかってくると思つて居ます。つまり二つの、何ていいますか、透過膜っていうか、壁を透過しなければ、日本国における大衆の繁栄っていうものとそれから第三世界、例えばエチオピア社会主義国家権力のもとにおける民衆の繁栄っていうものを、即座に対比することはできないと思つて居ます。これは浅田彰の間違ひだといふふうにはぼくは思つて居る、確信していますね。つまり、それは経済学普遍主義みたいなひとがよく考えやすいことなんだけ

と、現在において経済学的範疇、つまり価値論だけじゃなくて価格論っていうようなもの、商品の価格論っていうようなものを含めていうならば、それを限っているのは区切っているのはやっぱり国家なんですよ、あるいは国家の格差が介入してきます。だからぼくはそんな言い方をするのは間違いだと思えます。それは例えば、言い方を換えれば、浅田彰なら浅田彰が例えば京都大学の助手の給料をもらって、それで遊んでるじゃないかっていうふうな場合に、それは日本国民の税金をちゃんと給料でもらっててあいつは遊んでんだ、っていうのと同じなわけです。で、それは嘘ではないでしよう、つまりそれは間違いないけれども、しかしそういう言い方を否定することなしに、やっぱりぼくはこれからの理念っていうのは成り立たない、思想なんか成り立たないと思うんです。だからぼくは、浅田彰がその理念っていうのは成り立たないと、それでお前さんから給料をもらってて勉強しないで何か遊んでるじゃないかっていう（会場笑）、そういう言われ方をしたらあなたはどう思いますか。つまりそれは嘘ではないです、嘘ではないとぼくは思ってますけども、しかしそんな言われ方を肯定したら間違いだし、つまり肯定したら終わりなんです、だからぼくは肯定しません。だからぼくは浅田彰の方がボケてると思えますね（会場笑）。ぼくはそう思ってますね。だから「脳軟化症」どころじゃないんですよ（会場笑）、あの人たちはボケてるんですよ、つまり駄目なんです（会場笑）、という、ぼくはそう思ってますね、つまりいい気になっちゃ困るっていういまいましかね、そんなにいい気になっちゃ困りますよっていうふうに、ぼくはそう思ってますね。だからそれがひとつ「脳軟化症」に対するお答えなんです（会場笑）。で、これは多少アレですけどね。

三〇
三一

それから今度は、権力は悪いものじゃないんじゃないかっていう問題なんですけども、あのー、ぼく、橋爪さんのお仕事っていうの全部じゃないけど目を通してありますから、そうおっしゃる根拠っていうのもぼくかなりの理解の仕方をしてるわけです。そいでぼく自身も、あのー、もしも、もしもですけども、もしも国家の権力っていうものが、その国家のもとにおける民衆の内面的な構造っていういまいましょか、そういうものに対してあんまり意味をもたないならば、もたないという面からいえば、ぼくは橋爪さんの言われることに賛成なんです、っていういまいましかね、或る意味で賛成だと思ってるわけです。つまりそれをぼくの根拠から申し上げますと、要するに現在日本の一般大衆、労働者も含めて一般大衆っていうものは、だいたい自分自身が意識のうえでは、あのー何ていいますか、自分たちが中流だと思ってるものが六十パーセントから七十パーセントいるわけなんです、統計とすると、それはどういふことを意味するかっていうと、自分たちは意識としては現在の日本国家のもとにおける市民社会において、自分たちは半分以上をそこで質量ともに、つまり文化水準経済水準その他の水準で知的水準で、自分たちは半分以上を占めているというふうな考えをもちあがって六十七パーセントいるというのはいまのところ、そういう社会に突入しちゃうところと権力っていうものをどういふふうな考えかかっていったら、そんなことば、それは必ずしも国家から下へさがってくる権力で考えて考えられるかっていいたら、そんなことば、ただ傾向として上から下へさがってくるというのには、ぼくは意味をもたないだろうなっていうふうな思ってるわけなんです。つまり主人公自体が、大衆自体が自分を主人公だと思ってるのが六十パーセントいるわけですから、だから市民社会の上部にある国家っていうのの権力、つまりそれを抑圧した抑圧だとかかり背ってるってことには意味が、六十パーセントがた意味がないってことになり、つまり理屈からいって、ですからそこでは傾向線、傾向としては国家権力から下へさがってくる権力の傾向線があるよっていうふうなことはぼくは現在でも考えていますから、そこでは橋爪さんの言われ方に全面的に同じじゃないんですけども、ところが市民社会内部において言うならば、必ずしも権力の線

は上から下へいってるとは限らないんで、いってみれば、イメージでいえば、下から上へいってたり、或る場合は上から下へいってたり、下から上へいってたり、つまり局部的に見ますとそういうふうな上から下へいってるとか下から上へいってるとか、あるいは平行な権力で、つまり権力っていうのは意味がないっていうような部分があったりっていうふうな、非常にアトランダムに権力線っていうのを考えないと、それをちゃんと微細に極めていかないと、現在の事情に即さないんじゃないかなっていうふうなぼく自身も考えていますから、ぼくの理解の仕方です。そういうふうな理解の仕方をしていきますから、その部分では必ずしも橋爪さんの言われたことと不一致ではないっていうふうな理解をしています。ただ、要するに、現在の世界における国家権力、つまり国家間権力っていうのもいいわけですけども、世界史のなかにおける国家っていうものを考えて、ぼくはこれは抑圧権力であって、社会主義であろうと資本主義であろうと両方ともこれは抑圧権力だっていうふうな思っているから、そこでは漠然とではありますけれども上から下の、つまり大衆抑圧として働いているひとつの傾向線を考えるっていうふうな考えの方がよろしいんじゃないかって、それは捨てたくありませんから橋爪さんのお考えと一致しないかというふうな思っています。それからもうひとつ一致しないかと思われることがあります。それは、ぼくは今橋爪さんの言われたような意味でいえば幻想主義者ですから、つまりすべては幻想だっていうふうな思っていて、すべては個人幻想と対幻想と共同幻想だっていうふうな思っているわけですから、つまり国家もまた幻想なんであって共同幻想なんであって、つまり幻想から現実の市民社会に対して権力線っていうのは、たい引けるものなのかどうかということがあるわけなんです。で、これは非常に引きにくい線なんです。だからこれはn次元に屈折しての線みたいのを引くと何となくごまかしがきくんですけど、本当をいうと、幻想から現実へと線を引くことができるかっていうことは、つまり権力線を引くことができるかってことは、またそれは別に、上から下っていうのと別に、ちょっと考えなくちゃいけないことのように、それはぼく自身の自分の宿題みたいなふうな考えてることがあります。それが、あのー、そう

三二
三三

いうお答えにどうしてもなるんだと思います。だからある意味でよくわかりますけれども、ちょっとぼくの考え方っていうのは違うって思うことがいえると思います。

それから、えーと、これはそれと関連するわけだけれど、今橋爪さんが権力っていうのはイメージだけである、イメージでいえるのかっていうことになるわけなんですけれども、これはぼくは、あのーどうでしょう、つまりイメージでいえるのかっていうことは、比喩としてそういって意味あいにとられても、それからあのー、本当に事実具体的にそう思っているというふうなとられても、どちらでもかまわないわけ、つまり、お前が幻想主義者だ、さっき成田さんも言われてたんですけど、超幻想主義者みたいに言われましたけど、そうだからだ、っていうふうな解釈の仕方をされてもいいわけなんです、それはおかしんじゃないかっていう言い方をされてもいいと思うんです。しかしこれは別の意味でいうと、橋爪さんもある意味では、つまり、法体系を考える場合に言語っていうものを基体にして考えておられるのが橋爪さんの考え方ですから、つまり法体系を言語ゲームとして理解されてるっていうのが橋爪さんの考え方の基本にありますから、それはやっぱり同じことがいえるんじゃないでしょうか。つまり、法律っていうのは言語かっていうふうな言語自体がなる場合があるわけなんです。その問題は橋爪さんがかなりよく詳細に追究されておられて、ぼくは良くてありませんけど、ぼくなりに大ざっぱに読んで大ざっぱに橋爪さんっていうひとつはこういって、こういう考えのひたひたまでわかってるつもりでおります。だからそれと同じように理解してください。いいんじゃないかなあと思っています。つまり権力っていうのはイメージではないし、ってことですけども、ぼくもイメージじゃない部分がある、どこかで物質的なものにぶつかるところがあると思います。ぶつかる場面もあると思いますし、そういうことを決して無視してわけでもないのですけれども、あのー、ぼくがイメージだといえる、どういふところでイメージかっていわれたら、物質あるいは先程申し上げましたけれど物の配置っていうものが、本来物

ていうのはこういう配置以上に過密には、密度が濃くは、つまり濃度が濃くはできないはずなんだって
いうくらいに、過密になった物質のイメージあるいは事実のイメージってものを、事実ってものが積み
重ねられた箇所を想定しますと、これは商品でも何でもいんですけども想定しますと、そこでは濃度
が濃い物質の積み重ねなり自体がイメージに転化する、つまりイメージに転化して、イメージとして考え
て理解した方がよく理解できるんじゃないかっていう場面がありうるっていうふうにはぼく自身は考えて
おりますから、あのーそれは、ぼくはそこはそういうふうな理解していただければよろしいんじゃない
かってふうに思います。で、あのー、えーと、つまり経済学的価値ってのがイメージとして扱える
かどうかってことは、ぼくはわかりに断言することはできないんですけども、扱えると思ってる
わけです。だから例えばフルケが資本論で商品価値、価値と申しましたのと同じように、ぼ
くは、あのー、何ていいますか、つまりぼくが世界観として、ぼくが申し上げましたのは、申し上げ
ました問題は、もちろん権力っていうふうな理解もできますけども、もしもそういうふうな経済学的価値
を扱いたいならば、これは一種の時間単位であると思えます。ですから時間単位、もっと極端にいえば労働
時間単位でもいいわけですよ。つまりこれは、この軸を入れることで、言ってみればイメージとして扱えるの
でしょうか、イメージのケルバーとして商品価値を扱えるんじゃないか、商品の問題を価値として扱えるの
と同じようにイメージとして扱えるんじゃないかかっていうのがぼくの理解の仕方です。理解の仕方
ていいますか、大ざっぱな考え方で、具体的にはやってみないとわからないので、うまくできるかどう
かは別なんですけども、おおよそのところはぼくはそういうふうな考え方をしています。
だから、何ていいますかね、このことは、イメージとして商品っていうのはちょっと考えないと
いけないんじゃないかなって思えるところは、例えば、名古屋と東京にある企業がいたと、それは「ハ
イ・イメージ論」にそういうことちょっと書いてありますけども、例えば東京と名古屋で企業が何か

三四

三五

ひとつの企業企画、生産企画みたいなのをたてるっていう場合に、それは同じ場所に、東京なら東京、
名古屋なら名古屋に出張してきて、そこで会議を開いてそこで計画を決定してそこでまた東京に帰って
いく、あるいは名古屋に帰っていくっていうようなことが必要だったのに対して、現在高度技術が発達
して、名古屋と東京の両方にながら顔を見ながら会議をすることができて、それでこちらの計画書
ってのはすぐに東京の方に電送することができて、そういうことができるようになってくるようになってくる
わけです、やろうと思えばできるわけですよ、できるよ、そういうこと、ひとつだけ加味されなければ
計画決定に要した労働時間っていいですか、時間っていつの対して、ひとつだけ加味されなければ
ない時間があります。それは要するに二人なら二人、三人なら三人のひとが名古屋なら名古屋に出張
して、新幹線とか飛行機に乗って出張してまた帰っていくだけの労働時間、労働価値っていうような
のは、そこでひとりでに時間が折り返されていいますか、そこに加味されてしまうわけなんです。三
時間の会議で決定したとしても、それは三時間の労働時間ではないわけなんです。つまりその問題は、商品
往復の労働時間ってのがひとりでに入っちゃってことになるわけですよ。つまりその問題は、商品
の生産をイメージ化することにおおに関係があるっていうふうなぼく自身は考えています。だか
らイメージとしての商品って問題とそういう意味あいで、つまり一種の価値論の問題としても、そ
ういふ問題を考えてゆくってことは、たぶん俺は必須じゃないかなあって、頭のなかにそれ
があるんです。だからそれがぼくの考え方なんです、だから橋爪さんの言われたことは大変非常に、橋爪
さんのやっておられる場所から非常にびたりびたりと何か要所をついておられるように思いますけど、
ぼく自身は今お話ししましたようなことを一応はお答えとして言うことができるっていうふうな考え
ています。これでよろしいでしょうか。(会場拍手)

瀬尾 どうも。あんまりおもしろいので、ちょっと会場の方は待っていただいて、もうひとこと橋爪さんか
ら何かありますか。

橋爪 もう一段つっこむようなしつこい質問になりますけど、いいんですか。

吉本 あ、どうぞどうぞ。

瀬尾 どうぞ。(会場笑)

橋爪 根がしつこいんですから。あのー、えーと、今ある形の政治的國家が悪いんだと、で、ぼくも何て
いうのかな、悪いもんだとは思ってすけども、例えばエチオピアか何かで飢えてるひとがいると、で、
それはまず第一にエチオピアの政府が悪く、次に日本の政府が悪く、第三に日本の民衆が悪いと、で、
その原因の主たるものをすね、その政治的國家がつくっているから悪いのだと、こういうふうな御主
旨に聞こえたりんですけど、ぼくの理解は少し違ってますね。えーと、結局そうじゃなくてすね、そう
いう政治的國家をつくっているものが逆にエチオピアの生活様式というか、ファクチュアリティの堆積
であってね、エチオピアをエチオピアたらしめている。逆にそのもうひとつは日本の文化的な堆積なん
だ。で、もしですね、政治的國家をつくらなければどうなるかという、エチオピアの人々が大学船
に乗って日本にやってくると、ポトポトブルで、エチオピア語を話し、日本文化ってのはかなり
ごちゃごちゃになるわけですね。で、そういうのは嫌なんです、嫌っていうか、それを阻止するため
に人々が日本国政府をつくっているんじゃないかと、逆に考えれば。だから政治的國家っていうのはけ
しからんけれども、つまりエチオピアのことに責任があるけれども、逆にいうとエチオピア以外の場所
は飢えていないわけで、エチオピア以外の場所が飢えていない、例えば日本が飢えていないってことに
関しては功績があるわけですね。で、そういう積極的な面っていうものがいろいろあるから國家が機能
しており、今國家というものがあつたから、あのー、エチオピアの責任をとってすね、國家を全
部解消しようっていう思想もあつていいと思うんですけども、そういうふうになっていないというのが
リアリティだと思つてすけども、で、だから、國家がすね、例えば価値体系に責任があるかってい
うふうな考えてみますと、そのー、ちょっとややこしくなつてアレですが、リカルドの言っていることに

三六

三七

よると、価値体系っていうのは國ごとに違つて当然だと、で、リカルドは労働価値説論者ですけども、
國際貿易のとは違つてですね。で、A國とB國で価値体系が違う理由は何かという、A國には例え
ば或る資源がいっぱいあると、あるいは労働者がたくさんいると、で、B國は全然自然環境とか条件が
違つと、だから価値差つてのことができるんだと、で、資本とかですね、人間とか労働力が移動できれば価
格差がなくなるんだけど、それは無理だと、だから商品だけを移動するんだと、そうすると、価格差、
利潤が生じる方向にどんな商品が流れて國際貿易するのは起るんだって議論だと思つてすね。
何でその資本と労働力が移動しないのかといえ、それは最大のものは文化障壁だと思つてすね。言
葉が違つたりするから、労働力が移動できないんです。で、リカルドの理論はそう読めると。そう
だとすると、あのー、國家なんか関係なくすね、文化的まだらといひますか、気がつかないうちにも
う我々は日本人なわけで、で、気がつかないうちにエチオピア人であるひとがいると。そういうことが
非常にそのー、関係してるとはなにかと。だからわたしは政治的國家の責任っていうのは、吉本さん
がおっしゃるよりもちょっと軽いと、むしろ我々の責任が非常に重いということではないかと思つて
すけども。

瀬尾 あのー、えーと、ちょっとあのー、何ていうのか、ちょっと吉本さんのお答えを待っていたいて、
先程の第三世界の飢饉っていうのは結局めぐりめぐって日本国民のせいだつていう、ああいう議論って
いうのは成り立たないっていうのは、何というのか、そういうふうな形での世界の像っていうか、例え
ば、世界っていうのを、要するに世界っていうのを、世界を変えなさいいけないんだって、世界全体がこうな
てるんだからこれは駄目だと、で、世界全体を、世界を変えない限りはそれは駄目なんだという
方があつたわけだけれど、そういう問題ではないんだつてふうになつたときに、世界概念というか世界
理念っていうか、そういうのが本能的にもう世界って言葉を使つたときのその意味っていうのが
もう変わらなさいいけないはずだと思つてすね。で、それで、今の橋爪さんの話とまあ重なつて

いかどうかかわからないけれども、竹田さんが先程も「世界の向こう側云々」っていうことを言われて、それから竹田さんの書かれるものを見てもいつも、要するに世界って括弧つきの世界っていうふうにしてあるけど、「世界に対する欲望」っていうのをわりとまず前提として、あの一、それは否定できないっていう形ででてるような気がするんですけどね。それから加藤さんがこのまえ「還相と自同律の不快」なんかで書かれていた、世界を変えるために我々は何をなすべきかっていうところからすべての議論が起こってきている、で、世界を変えるためには、っていうところをじゃどういうふうにするの、今はその一、そういう前提自体がどう疑わなければならないかっていうことがあるような気がするわけですね、その一、その一、加藤さんからじゃちょっと、まあそれに直接ふれなくてもいいですけど、何かひとこと言っていたらどうですか。ちょっとよくどうお答えすればいいか考えがまとまらないので……。

加藤 あの一、ちょっと竹田さん先に話してもらっていいでしょうか。ちょっとよくどうお答えすればいいか考えがまとまらないので……。

竹田 あ、いいです、はいはい、経済学の話になって質問されたらどうしようかと思って困ってたんですけど、やっぱり回ってきまして、あの一、ひとつはよく言えるのは、さっきイメージの論のなかで物質性とか権力性みたいなものは論じられるかっていうふうなことが、まあ、橋爪さんからまして、ぼくは論じられるっていうふうな思ってるんですけどね、それはどういふことかかっていうと、さっき、さっきの話にたわりますけども、シミュレーションの世界、つまり映像としての世界、あの一ゲームの世界ってそういう世界なんですけども、そういう世界なかたけでは物質性とか権力性ってのはあんまりでてこないわけですよ、基本的にないわけですよ、つまり像だけだったら、現実とか幻想とかっていうものが成立しないわけですよ、ところが何で人間がもってる世界像、えーとよくはあの一、ちょっと難しいかもわからないんですけど、基本的には観念論者なわけ、昔の言葉を使うと観念論者な

わけて、全部個人のなかの世界像に世界の問題っていうのは還元できるんだっていうふうな思っています、その物質性とか権力性っていうのは何かかっていうと、さっき言った人間が実存する、つまりあの一、死んじやたらもうゲームができなくていいっていうふうな契機ももってる。それからそのことによつて、これができたらもう死んでもいいっていうふうな、そういう超越的な世界をもっちゃう。あの一、それがどうもゲームと人間存在の違うところじゃないか。で、その契機があるために、像が力として現われてくる、つまり権力性や物質性として現われてくる、あるいはエロス性を帯びるわけですよ。つまり単に像というものを、あの一何ていうかな、えー、色彩や線分や影や陰影やそういうことだけで構成する、像というのは物質性とか力とかエロスっていう要素をもたないんですけども、そういうあの一、人間が実存という問題をそこに抱えているために、権力、エロス、物質性っていう問題がでてくる。つまり像っていうのは人間にとって、ぼくの言い方をしますと基本的にエロスのな連関としてあると、それは実存っていう契機を人間が像に封じもってるからそうなるんだ、ということになるわけですよ。

それから、権力の問題なんですけども、そういうふうな考えをいいますと、ぼくはあの一、何ていうかな、つまり、どこに一番悪い問題があるんだ、それは国家だろうか民衆だろうかっていうふうな順番にちょっとならないで、もちろんそれは補助線としてぼくもそういうふうにあとのほうで考えていたりますんですけども、基本的にはそういう考え方をしないわけですよ。で、権力は悪であるかないかっていうふうな考え方がたんですけど、ぼくはね、権力っていうのは基本的に悪であるかないかっていうふうな、これもわかりにくいかわかんないんですけども、権力っていうのはいったい何かっていうふうな、ざーとつきつめてみると、人間がもってる幻想関係のなかで、あの一、例えばAというひととBというひとがいて、この関係はあるべき関係でないというふうな、思ったらそれが権力関係になるっていう感じなんです。例えば、お母さんと子供の赤ちゃんの関係っていうのは、えー、客観的に見るとまあ一方的にお母さんが力をもっているという意味では、あの一、子供を自由に縛りつけてお勉強し

ると、ここへいかなきゃ駄目だっていうふうなことを言っていて、あの一、子供を縛りつけるという点ではお母さんが権力をもっているっていうことがいえる。あるいは逆に赤ちゃんからいうと、赤ちゃんは泣き声によってお母さんを縛りつけるわけですから、そういう意味で見れば、子供の方が権力をもっているっていうふうな言い方ができるわけですよ、けどもぼくはそれは、あの一、例えば、あとで言った赤ちゃんとお母さんの関係っていうのは、権力関係と呼べないと思うんです。で、それはなぜかという、お母さんのなかに子供の意識のなかに、本当はこういう関係じゃなきゃいけないの、こいつは俺を抑圧している、っていうような意識が発生しないと、それは権力とは呼べないわけですよ。単なる関係があるだけですよ。

で、それを社会の問題に移して考えると、権力という言葉がどういふ意味としてつかまれるかという、すごく単純にいうと、さっき吉本さんが六十パーセント七十パーセントのひとが中流意識をもっていて、そうすると権力が上から下へ流れてくるっていうふうな言い方があるんですけど、権力って世界像のなかで、俺たちは共通してどこか非常に悪い奴に抑圧されてるんだっていうふうな像がね、構造として成立しなければ、つまり権力関係があるっていうふうな言い方はないんだ、っていう言い方にぼくのつきつめ方ではなるわけですよ。で、あの一、だけど、例えばひと昔前を考えればやっぱり、資本家が労働者を抑圧しているっていうふうな言い方がね、なるほどそうだったっていうふうな実感があった、確かにこの世の中っていうのは間違っているっていうふうな、そういう言い方が多くの人間の、ま、いわば共同幻想にとりアリティがある。で、これは権力関係だっていうふうな、人間がそういう権力があるっていう像をたててそれを直していこう、あるいは改編していこうっていうふうな、そういう根拠をもってるんだっていうふうな思っているわけですよ。ですから権力関係っていうのは、初めの話に戻しますと、つまり全部個人の頭のなかの世界像に還元するっていうのは非常に乱暴な考え方じゃないか、って

いうふうないろいろな言われるんですけども、そうじゃなくて、人間っていうものがいろいろな思想をたてて世界像というものを持って、そこで客観的な関係を見いだそうとするんですけども、その客観的な関係性というものを削りだす一番の根拠になっているのは、本当は個人、何ていうの、その世界像の内側にそういう分節っていうのは全部でてる、で、そこで権力って言い方や階級って言い方が本当であるかどうかっていうこと、何ていうかな、基盤がある。つまり現実そのもののなかに階級があるか、あるいは権力があるかっていう問い方は、まあ、しなくていいわけですよ。ぼくの言い方っていうと、それはしても問えない。

吉本さんがよく、「大衆の原像」っていう概念で、平均的な人間の生きてる意識っていうものを探らなきゃいけないっていうふうな言い方をされますけども、ぼくのなかではつまりその問題っていうのは、ごく普通のひとがこの社会っていうものをどういふふうな世界像として感受している、で、そのなかで自分の生きるということを生き難く思っているかどうか、つまりそういう問題に還元できるんだ。で、えーと、ぼくがさっき吉本さんの世界像っていうふうな言い方ってのを、あの一、つまりその問題を全部世界像に還元してゆくと、ちょっと突飛になりますけども、あの一、ニヒリズムみたいな問題がでてくるわけですよ。で、あの一、これも簡単にひとことでは言えないんですけども、あの一、つまり、現実っていうのは何もなくて、みんな人間の世界像の内側の問題だっていうふうなことを、少しづつ人間が身にしみて感じてくると、必ずニヒリズムみたいなのがでてくるわけですよ。で、それが何かぼくは新しい世界像のなかで、つまり六十年代以後っていうのはそういう実感が普通の人のなかにも入ってきたっていうのは大きいことだと思ってるんですけども、あの一、ひとつの大きな問題である。例えばぼくなんかは個人の頭の世界、世界像の問題に全部問題を還元しちゃえばいいんだっていうふうな思っているんですけども、吉本さんは、逆にというか、あの一、世界をどうとらえるかっていうことの問題っていうか、或る極限まで押し進めた形でそれをつかんでやるっていうふうな言い方をされて、ぼくはそれには

大きな根拠があるなっていうふうには自分なりに思っていて、つまりそれはそういうニヒリズムみたいなのとどういうふうに対抗してゆかかっていうふうな場面で、たぶん世界像、究極の世界像っていうふうな究極の世界視線っていうふうなものをつくっていくってことは、やっぱり非常に課題なんじゃないだろうか。もしそれを言えば、たぶんこれからますます高度社会のなかで人間が、いったい現実像がどこにあるか、現実というものがどこにあるんだかわかんないっていうふうな状態が進化していったときに、要するに全部幻想なんだ、全部個人のなかの世界像なんだというふうに言った場合に起こってくるニヒリズムの問題が避けられないんじゃないだろうか。っていうふうなことをぼくは考えてるんです。で、直って、ぼくはあんまり権力の根拠が日本にあるか第三世界にあるかっていうふうな感じや発想はあまりもたなくて、直接さっきのことには触れられないんですけども、ま、大体そんなような考え方をしているんです。

酒尾 はい、どうも。えーと、あのー、本来時間は時までっていうふうには予告してあって、それ以後用事かあって困るっていうような感じもいるかもしれないんですけど、あのー、何ていうんか、ちょっとやめる気がしないもんで(会場笑)、やっぱり今話しておかないと、ちょっともうこれは話せないんじゃないかっていうようなことがだんだん出てきてるとたぶん思うので、あのー、もうお客さんひとりもいなくなってもぼくだけでもやろうって感じがあるの、あのー、斬断やろうと思ってますので、御臨力をお願いいたします。(会場拍手)じゃ、加藤さん、ひとことお願いします。

加藤 えーと、あんまりぼくそんな明確な話できないんですけども、橋爪さんの話はぼくはおもしろいんですけど、おもしろく聞きました。それで橋爪さん二回目に説明したときに、悪いのは実は我々なんじゃないかって言ったので、そういうふうな説明の仕方をしたので、橋爪さんがだしたその「権力っていうのは本当に悪なのか」という問題がちょっと狭いところにね、入っちゃった。で、本当はもっとね、そんなこと言いたくなかったんだらうなあって思うんですけど(橋爪うなづく)。そう言わないとね、なかなか

かちょっとわかってもええなかなって気持ちもあって、そういう表現がでてきた。で、そう言わないほうがええってわかりやすいかもしれないなあっていうふうにして、ぼくは聞きました。それで、確かにあのー、どかがそんな感想を強いたかっていうと、やっぱり橋爪さんの話がおもしろいと思ったのは、橋爪さんの考えをひとつの生体として見ると、何かが欠けてるんですけども、あのー、びったりいってないんですよ。何かが欠けたまま、今ただ、とにかく権力っていうのが悪っていうふうな言われて、それがどうも本当にそうなのかなあっていうことを考えたひとは、あんまりいなかったし、特にぼくらこの年代からね、こういう問いがでてきたっていうのは、あのーほとんど、おもしろいと思う。ぼくも高校の頃は吉本隆明なんて名前も知らなかったんですけどね、大学に入ったらみんなが「言語美」「言語美」なんて言ってんで、何のこともわからなかったんですけども、だいが奥手で三年か四年たってから(笑)いろいろ読み始めて、みんなあまり吉本さんのこと言わなくなつた頃(笑)、吉本さんの「言語」として美とはなにか」なんていうのを大学なんか出たあと何べんも読んだんですけど、あのー、そういう年代って、だいたい権力っていうのはどういふ語感でね、どういふところで、あのー非常に語感もってるんですけどね、語られるかかっていうのがしみこんじゃっていろいろいふところ、前にも聞いたときから、それを問い直すひとがでてきたという話を、橋爪さんの話ですけど、前に酒尾さんに聞いたときにもね、一瞬ちょっとぎょっとしたんですけども、今もう一度こういう形で話を聞いて非常におもしろいんですね。おもしろいっていうのは、あのー、落としまえてない考えがここに出てくるっていうところで、ぼくはおもしろいなあと思います。

で、そのこととあんまり関係ないんですけども、ぼくも二ヶ月くらい前に吉本さんの考えについて、あのー、だいが吉本さんに影響を受けててですね、一番影響を受けてた考え方っていうのは恐らくぼくにあっては「還相」という考え方だったかもしれないので、ずーと考えていてその考え方をひっくり返したときにどんな問題がでてくるのかなっていうふうな、ま、それは吉本さんの問題ではなくてぼくの

問題なんですけども。そんなところから何かこの間ぼくも、ぼくのつもりでは全然批判ではないですけども、とにかくこういうところはどなんだろうっていう問題を提示したんですけども。あのー、そのね、心理的になっていうか、そのきっかけていうのは単純なんです。吉本さんのものをずうっと読んでいくとね、ここに何かがある、ここで勉強したほうがいいっていうか、ここに何かがあるからこれは何だろうって思っちゃうんですけど、ぼくはそういうのが自分で嫌なんです。あのー、だからそれはさっきの酒尾さんの発言につなげると、あのー、あと竹田さんの言葉でいうと「世界に対する欲望」というふうなことになるかもしれないんですけども。あの、ぼくもきょうもろくなこと言ってるんですけども、何かこう意味のあることをね、頑張って一応少し考えてきたら、その何かアースにぬけてしまったんですけど、名古屋駅に着くまでに(笑)。あのー、ぬけてしまったって何もありません。あのー、こう、自分で何かをこう訊きたい質問したいっていうふうにして、あのー、考えると、ま、あんまりろくなものほくの場面でできませんけども、そうじゃなくてね、つきあうような回路を何かこう、考える回路といつてもいいんですけども、もちたい。特に吉本さんのような方とはです。どうしたらムダ話ができるかなと考えちゃう。で、きょうのね、お話をだから一応批判めいたことを言うとする、それは先程権力視線、権力の線ですね、という話になるでしょうね。これはほんとにもお話を聞いて「ハイ、イメージ論」でそんなに強く感じなかったものだから、あのー、ちょっとぎょっとして、ここに吉本さんが今話されてくることのひとつの力点があるっていうふうな聞いたんですけども。何ていうんでしょね、あのー、つまり、究極映像、世界視線というものに対する、で、どこにさっきの橋爪さんの話でいうと、その、何か塗り残した場所が置かれてるのかなあっていうふうなこと感じて、ぼくは何となくそういうところに自分を含めてですけどね、かなり考えるべきことがあるかなって感じがしています。橋爪さんが悪いのは実は我々じゃないかと言われたのと似た感じで、権力の話をもう少し塗り残して考えておいてもらったほうが何かこちらの受けとるものが幅広で大きい、ということなんですけども。

すけども。

酒尾 じゃ、ちょっと間があいてしまって恐縮ですけど、吉本さんそれじゃちょっと今の。吉本 は、いや今加藤さんの話をお聞きしてね、やっぱり、どう言ったらいいんでしょね、あのー、うん、いや、その、いやきつとそうなるから真面目じゃない話(笑)したかったなあと思っても(笑)、初めから思ったんですけど。何か要するに、大事なもんだけれども、何ていいますかね、こう、するって入ってきちゃうもんだが、大事なもんだけれども意識にのぼらない論議にのぼらないことになっていっちゃうことに対する戒めを、加藤さんが今言われていたっていうふうな、ぼくはそういうふうな理解したんで、あのーそんなんだよなあっていう感じをもちましたから、少し柔かく、柔かくっていうか、その、橋爪さんの言われたことアレなんですけども、ぼく、橋爪さんが二回目に言われたことはね、どう言ったらいいんでしょね、あのー、内容が危険っていうんじゃなくて、知識として危険なような気がするんです。つまり知識として危険っていうのは、つまり、よく熟してないことを言われているような気がするから、その段階での論議っていうのはあんまりアレしても仕様がなないんじゃないか(笑)っていうのが、ぼくの感想です。

それだけけれども、基本的なことだからぼくアレすればいいので、あの、大衆が国家を決定してるか、国家が決定してるか、国家は全面的にそんなに悪なのかどうかっていうふうなことについては、あんまり橋爪さんの言われたことに異論はないっていうか、感想はないといましようかね、あのー、それはそういうことはどう考えてもいいですけども、感じはいい感じはいいです。ただ、ひとつだけ、ぼくはやっぱり国家って、つまり橋爪さんは例えば国家が抑止力としてなければ、例えば世界のどこかの民衆が飢えないところに行こうっていうんで集まってきたりするのは、過剰に集まってきたりしたら困るっていうふうなことを阻止できないじゃないかとおっしゃるけど、ぼくは逆に考えて、国家があるから、つまりあのー、極端なことという国家があるから、抑止してるから、例えばここに移動すれば均質に飢

えないはずなのに、そこへ行くことができないとわかってふうになつてはやっぱり国家があるからだと
思つてゐるから、究極的には、そういう意味ではやっぱり悪だと思つてゐます。だから、これは社会主
義国であるかと資本主義国であるかと、社会主義国は建前としては国家はあつてはいけないんですけど
も、しかし現実には国家を固執してゐるわけですから、これも含めてやっぱりこれはないほうがいいんだ
両方とも悪なんだつてふうにぼくは思つてゐます。だからそういう意味あひでは、別に資源がないから
飢えて資源があるから飢えないのであるとか、価格構成が違ふんだつていうような論議は、ちよつとぼ
くはやめてほしいといひますか、それはあまりに熱くない論議で、あのー、ちよつとそれはその段
階ではあまり論議にならないんじゃないですか、えーそのー、ならないんじゃないですか、基本的
ふうにはぼくは思ひますから、そういうところでは何か言いたくないような気がするんだけども、基本的
には、あのー何ていひますか、例えばバタイユなんかがいうように、ここに飢えてゐる地域の民衆がい
て、ここに過剰な生産物、商品を持つてゐる地域があつたらば、それは飢えてゐるところに無償
で、そのー、或るー、今でいへば国家が主導して、それを無償で提供しちやうつていふふうなやり方
で、その一番いいんだつていふ考え方が、バタイユみたいなものになりますけれど、ぼくはそれは基本
的にそうなんじゃないかなつていふふうに思つてゐます。それはそんな極端な論議をしなくても、結局
は国家つていふものの融通力つていひますか、管理力つていふものの障害つていふものが、飢えさせて
ものと飢えさせていひないものとを、地球上の地域に発生させる第一責任つていふのはそこなんじやな
いかつていふふうな思つてゐます。これは日本資本主義が繁栄してゐるの、エチオピア社会主義経済
が貧しいつていふのと、それがその責任なんだつて、そういう経済繁栄力つていひますか、経済力つて
いふのが責任なんだと考えるよりぼくは、国家の存在つていふもの、あるいは国家が環境を区切つてい
るつていふ、そういうことと管理力の存在、あるいは軍事力管理力つていふものも含めて、そういうもの存
在が第一障害なんだつて考えを、ぼくは棄てない棄てられないです。そこは橋爪さんの言われること

四六

とまるで違つていふふうな思つてゐます。そのほかのことはぼくは、橋爪さんがそういうふうな言わ
れるならそれでもいいですよつていふくらいの問題で、あんまりそれは熱くない論議のような気がす
るんです。でも最初のあれはものすごく適格に橋爪さん自身のお仕事と、それから考え方と、業績つて
いひますか、そのうえに立つて非常に適格に言われたつていふふうな、だされたつて、それに十全には
俺は応えられないなつていふふうな思ひましたすけども、二回目のはちよつとぼくはそれはしほしほ
ほうがいい（笑）んじやないかつて、あまり意地悪な質問つていふふうになつていふふうな気がぼくはしま
したんですけどもね。

四七

瀬尾 はい、どうもありがとうございます。えーと、まあ時間のことはいさ言いたくないけど、だいたい
おしてきてるもので、やっぱり会場からちよつと訊いたほうがいかなく思つて、ほんとにひとことず
つて感じになりますけど、あのー何かこれだけはつていふ方がいらつしやつたら、手を上げていた
ければ、マイク持つて走りまさんで、どなたかいらつしやいますか。ま、ちよつと、しんとしちやつた
りなんかして、それじゃちよつと、何人かの方がほんとは来てらつしやるつていふのわかつてゐるんで、
勝手ですけど指名させていたしまして、あの、きょうわざわざ横浜から来ていただいてまして、「試
行」なんかで「太宰治の場所」とか「ヨブ記註解」とか連載してらつしやつて、今、家族論、教育論な
んかでいろいろすごくたくさん書いてらつしやる小浜逸郎さん、すいませんけどひとこと。

小浜 座つていいですか。

瀬尾 はい、いいです。

小浜 立つとあがつちやうもんで、ちよつと。えーと、突然指名されて、実は数日来、俺が痛くて仕様がな
くて、まともに頭が働いてないんで、言うことが支離滅裂になつちやうと思ふんですけども。えーと、
今の論議をずうつと聞いてて、それぞれの方がそれぞれの立場でね、頑固に自分のアレつていふものを言
いてゐるつて、で、ぼくにはぼくの考えがあるぞつていふことあるんだけども、それまた言つと、よけ

い何かこう大変になつて減茶苦茶になつちやうと思ふんで、あのー、きょう吉本さんのお話のテーマが
「イメージとしての世界都市」つてことなんで、都市つていふことを俺はどういうふうを意識化して
だろつかつて考えてたんですけれど、あのー、ぼくは横浜生まれの横浜育ちで、そういう意味では純
粋の都会つ子つていふことで、俺が都市なんだみたいな感じ持つてゐるわけですね。で、それはあのー、
どういふことかつていひますと、農村つていふもののリアリティつていふの全然わからないので、逆に
自分つて都市とは何かつていふのが今度は明確にイメージ湧かないつていふか、対象化できないつて
ことがあると思ひます。で、あの、まあ、ちよつと話が自分のことになりすけど、横浜つていふ街は、
まあ港ヨコハマとか言われて、全国的に少し開明的ないイメージつていふの与えてゐるような気がす
るんだけど、少くとも名古屋よりはいいイメージじゃないかなつていふ感じ（笑）がしてゐるんですけど
あのー、実際に生まれ育つた土地の横浜つていふのは、そういう港ヨコハマ、西欧に対して例えば窓に
なつて玄関口になつてゐるからいいイメージなんだつていふことではなくて、その実体としてのは大変
狼狽なところなわけですね。で、それは、大体どういふことがあるかとつて、二つくらいあると思
んですけども、ひとつは名古屋のようにドーッと広がつた平野ではなくて、大変に山坂の多いでこぼ
こぼした街で、繁華街つていふのがのんびんだらりと広がるような、自然に都市が広がつていくよ
うな感じがなつていふところがひとつあるつていふことが言えると思ひます。それからもうひとつ、京
浜東北線という電車が横浜のちよつと中心街のところを走つていまして、その、何ていひますか、大
象徴的なんですけれど、東京のほうから京浜東北線に向かってきますと、左側を見てますと、いわゆ
るあのー、官庁街がバーと並んできれいな街なんです。で、それは街並運動なんつていふのがあつて、
建築家協会賞だつたか建築学会賞だつたか忘れましたが、そういうのいたつたり何かして、港ヨコ
ハマの玄関口つていふイメージ、表向きイメージでどんだらしてゐるわけすけれども、ちよつと右
側に座つて右側の窓を見ますと、寺町のドヤ街という有名な、東京でいへば山谷みたいなのがドーッと広

四八

がつてまして、その何ていふか、落差みたいなものはほんの鉄道ひとつ隔つただけでガクツと違つて
いふようなことあつて、それはあのー、さつき吉本さんのお話のなかにあつた、都市は異化作用を喚起
するものがあるつていふことがこれからの世界都市つていふものの必要条件だ、みたいなお話あつたんで
すけども、そういう意味でいふと横浜つていふのは狼狽なつていふものをものすごく内包して、無秩
序で減茶苦茶なところがあつて、それは名古屋のように戦後都市計画をやつてパツと造つた都市つて
いふのとかかなり違つていふところがある。そういう意味ではむしろ何ていひますか、あのー、そういう意味で開
明的だつていふかね、そういう異化作用を喚起するものつていふのは、俺の子供のときから横浜つて
いふのはあつたんだなんていふの考えてたんですけど、あれであのー、それに関連して、いへ、関連し
てないんですけども（笑）、あのー、ちよつとぼくは食いつめかけたことあつて、大学があつた、建築
をでたもんで、友だちで都市計画の事務所やつてゐる男がいたもんで、そのとどこに泣きついて一
年ばかり手伝わせてもらつたことあるんですけど、そこであのー、何をしたかといひますと、結局ま
あ、お役所から発注されたいわゆる都市計画の図案みたいなものを書くわけすけど、それをどういふ
ふうにするかといひますと、大体スケールが五万分の一とか十万分の一、せいぜい微視的になつても三
十分の一ぐらいの、そういう大きなスケールでもってラチスをはかるわけすよ、それで地図の上に
トレーシングペーパーを何枚も重ねまして、それであつてゐる土地はどこかつて、土地利用の都合、人家
の密集する度合つていふのを、だんだんだんだんしぼりだしてつて、こゝはあつてると、で、これは
法的規制もないから、じゃこゝを土地利用の対象として考えようじゃないかみたいなことやるんだけど、
何しろスケールがそういう十万分の一とか何とかがすから、ちよつとトレーシングペーパーがずれちや
うつて文鎮が動いちゃつたり何かすると、もう全然、十キロぐらい違ふ（笑）土地を対象にしちやうとい
ふようなことがあつて、あのー、こんなやり方でやつて何か人間の生活の現実なんかつかめんじやない
かつて、ぼくすごくその友だちにくつてかかつたわけですね。で、そいつは別にそんな権力的な奴じや

四九

っていうようなことはどこからも始まらないって言うことが、今一番問題なんじゃないかっていうふうに、基本的にはそう考えてるわけですけどね。

瀬尾 わかりました。えーと、あのー、それじゃ、えー、そろそろエンディングという感じですけども。もうほんと時間が大幅に上まわっているの、締めくくりにほんとひとことずつ、ちょっとひとことずつ感想を述べていただいて終わりにしたいと思いますので、成田さんからひとことずつお願いします。

成田 あのー、カラオケの会場はどこでしょうか。(会場笑)

瀬尾 では、橋爪さん、どうぞ。

橋爪 未熟なのは確かですけど、未熟であることを恐れているのは仕様がないので、えー、まあ、頑張ります。(会場拍手)

瀬尾 竹田さん。

竹田 ぼく言いたいこと全部言っちゃったんで、早く煙草が吸いたい。(会場笑+拍手)

瀬尾 じゃ、加藤さん。

加藤 何か言いたいこと全然言わなかった(笑)(会場笑)ような気がしてますけども、あのー、要するにあのー、ぼくは自分のなかにあるひねくれた気持ちっていうのがあってですね、それがあのー、今吉本さんがやってるのがおもしろいって最初に言いましたけども、ひねくれたものっていうのの意味を今取りだそうとされてるようにも見えて、そこは非常におもしろいってことなんです。それだけです。(会場拍手)

瀬尾 では吉本さん、最後にひとことふたことお願いします。

吉本 あの、ぼくはもういいんですけど、やっぱり半分は井上ひさしの離婚問題っていうの(会場笑+拍手)やりたかったという感じが半分はあります、っていうのがぼくの感想です。

瀬尾 あのー、そうですね、菊屋がちょっと大問題を取り上げすぎたところがありますけれども、あ

五四

五五

の、まあ、次の機会に井上ひさしの、もうちょっとだけ(笑)時代遅れになってしまっていますが。えーそういうわけで、もうほんとに長い時間、会場の皆さんもお疲れになったと思いますので、このへんでお開きしたいと思います。会場の皆さんもありがとうございました。ゲストの皆さん、吉本さんどうもありがとうございました。拍手で……(会場拍手)

(1986・10・19)

「フリートークに関する記録上の責任は、筆者(荒尾信子)と編集部にあります。」
『菊屋』第三四号 一九八七年二月

- 加藤典洋 評論家。一九四八年山形県生。『敗戦後論』など。
- 竹田青嗣 評論家。一九四七年大阪府生。『陽水の快樂』など。
- 橋爪大三郎 社会学者。一九四八年神奈川県生。『はじめての構造主義』など。
- 成田昭男 詩人。一九四七年愛知県生。『文字 声 自然』など。
- 小浜逸郎 評論家。一九四七年神奈川県生。『時の黙示』など。
- 北川透 詩人。一九三五年愛知県生。『北川透詩集』など。
- 瀬尾育生 詩人。一九四八年愛知県生。『瀬尾育生詩集』など。